

モルガンお雪

長谷川時雨

青空文庫

まあ！

この碧い海水の中へ浸ったら体も、碧く解けてしまやあしないだろうか――

お雪は、ぞつとするほど碧く澄んだ天地の中に、呆やりとしてしまった。皮膚にまで碧緑さが滲みこんでくるように、全く、此処の海は、岸に近づいても藍色だ。空は、それにもまして碧藍く、雲の色までが天を透かして碧い。

「まあ、何もかも、光るようね。」

「碧玉のふちべというのだよ。」

と、夫のジョージ・デイ・モルガンは説明した。

お雪は、碧い光りの中に呆やりしてばかりいられなかつた。

白堊の家はつらなり、大理石はいみじき光りに、琅玕のように輝いている。その前通りの岸には、椰子の樹の並木が茂り、山吹のような、金雀児のようなミモザが、黄金色の花を一ぱいにつけている。

岸の、弓形の、その椰子の並木路を、二頭立の馬車や、一頭立の瀟洒な軽い馬車が、しつきりなしに通っている。めずらしい自動車も通る。

「二ースつて、竜宮のようなところね。」

お雪は、岸から覗く海の底に、深い深いところでも、藻のゆれているのが、青さを透して碧く見えるのを、ひき入れられるように見ていた。足許の砂にも、小砂利にも、南豆玉の青いのか、色硝子の欠けらの緑色が零れているように、光っているものが交っている。

「あたしは、一度でも、こんな気持ちのところにも、いたことがあつただらうか——」

お雪は思いがけないほど、明澄な天地に包まれて、昨日まで、暗い、小雨がちな巴里にいた自分と、違った自分を見出して、狐にまつままれたような気がした。

「巴里は、京都を思い出させたようだったからね。」

モルガンは、此処へ着くと急に、お雪が、昔のお雪の面影を見せて、何処か、のんびりとした顔つきをしているのが嬉しかった。もともと淋しい顔立ちだったが、日本を離れてから、目立って神経質になり、尖りが添っていたのが、晴ればれて見えるので、

「以前のお雪さんになった。」

と悦よろこんだ。

ニコリと笑ったお互たがいの白い歯にさえ、碧さが滲しみとおるようだった。

「何見てるです。」

と言われると、お雪は指のさきを、モルガンの眼のさきへもって行って、

「手のね、指の爪つめの間から、青い光りが発でるようで——」

と眼をすがめて見ているお雪があどけなくさえ見えるのを、モルガンは、アハハと高く笑った。

「あなたは、ニースへ着いたら、拾歳とおも二十歳はたちも若くなつた。もう泣きませんね。」

「あら、あて、泣きなんぞしませんわ。」

「此処こゝの天てんの色、此処の水の色、あなたを子供にしてくれた。気に入りましたか？」

お雪は、それに返事する間もなかつた。急いでモルガンの肘ひじを叩たたいて、水に飛び込む男女を、指さした。

「人魚ニンフ、人魚ニンフ。」

若い女の、水着の派手な色と、手足や顔の白さが、波紋を織る碧い水の綾のなかに、奇あやしいまでの美しさを見せた。

「西洋の人って、ほんとに綺麗ね。」

溜息ためいきといっしょに、お雪がつぶや呟くようにいうと、

「そのかわりあなたのように、心が優しくない。」

と、モルガンは妻の手をとった。

帽子をとったお雪の額をグツと髪の上までモルガンは撫なで上げたとたん、彼は叫んだ。

「おお、マリア観音かんのん！」

好奇にみちた彼の眼は素晴らしい発見に爛らんらん々と燃えて、

「うつくしい、うつくしい。大変に美しい。」

とお雪の頭を両手でおさえたまま、いつまでもいつまでも見入るのだった。

白哲はくせきの西洋婦人ひとたちにもおとらないほど、京都生れのお雪の肌はだは白かった。けれど、お雪

の白さは沈んだ、どことなく血の気の薄い、冷たさがあつて、陶磁器のなめらかさを思わ

せる、寒い白さだった。それが、明澄な碧緑みどりの空気の中におくと、広い額の下に、ふつく

らした眼瞼まぶたに守られた、きれ長な、細い、長い眼が——慈眼あまのまなこそのもののような眼もどが、

モルガンが日本で見た、白磁の観世音かんぜおんのそれのようだった。

と、いうよりも、いま、お雪の全体が、マリア観音の像のように見えたのだった。キリシタン宗門禁制、極圧期に、信者たちは秘ひそかに慈母観音の姿にせて造ったマリアの像に、おらつしよしたのだという、その尊像を思いうかべるほど、今日のお雪は気けだか高く、もの優しいのだった。

おお、あそこの岩窟がんくつのなかに据えたならば、等身の、マリア観音そのままだと、モルガンがお雪を愛撫あいぶする心は、尊敬をすらともなつて来た。

「お雪さんを、わしは終世大事にします。」

模糊もことして暮れゆく、海にむかつて聳そびゆる山の、中腹に眼をやりながら、モルガンは心に祈るようにすら言った。

お雪は、そういつてくれる夫の、眼の碧さから、眼も離さないで、

「あたしこそ、あんなに騒がれて来ましたのですもの、あなたに捨てられても、おめおめと日本へ帰られはしません。」

お雪の背中に手を廻して、モルガンはひしと抱きよせた。口にこそ出せないが、感謝と慚愧ざんきとをこめた抱擁だった。

——お互に、痛手はあるが、もう決して今日からそれをいわないことにしよう——

男の心にも、女にも、そんな気持ちだが、ひしひしとして、二人の魂を引きしめさせた。

「ニースへ別荘をつくらうか。」

モルガンは気を代えるようにいうのだった。

モルガンにすれば、はじめてニースに来て見た旅行者^{エトランゼ}ではなかった。幾度か華^{はな}の巴里^{パリ}の華やかな伊達女^{だておんな}たちと、隠れ遊びにも来ているのだが、不思議なほど清教徒^{ピユリタン}になつていた。

一流のホテルが、各自^{たがひ}にその景勝の位置を誇つて、海にむかつて建ち並んでいる。その前側が大きな弓型の道路で岸の中央に、海に突出して八角の建物のカジノ・ド・フォーリーが夢の竜宮のように青ばむ夜を、赤々と灯^ひを水に照りかえしている。

ホテルの窓々からも、美しい灯が流れ出しはじめた。山麓^{さんろく}のそこ、ここからも竜燈^{りゆうとう}のような灯^{とう}が点^{とも}りだした。天の星は碧く紫にきらめいているが、竜燈は赤く華やかだ。

「青い月。」

と、モルガンは、窓へお雪を呼んだ。

「こんな月、見たことありますか。」

え、とお雪はうっかりした返事をしていた。洛外^{らくがい}嵯峨^{さが}の大沢の池の月——水鏽^{みさび}にくも

る月影は青かったが、もつと暗かった。嵐山の温泉に行った夜の、保津川ほづがわの舟に見たのは、青かったが、もつと白かった。

宇治橋のお三の間で眺めた月は——といたかかったが、それは誰と見たときかれるのが恐こわくつて、お雪は、ふつと、口をつぐんでしまった。

お雪に、竜宮城へ泊つたような夜が明けた。

お雪が長く見なれて来た、京都祇園ぎわんの歌舞の世界は、美しいにはちがいないが、お人形式の色彩だったから、お雪はあんまり明澄すぎる自然に打たれると、かえつて、覚さめているのか現うつつかわからない気がして、夢幻境にさまよう思いがするのだった。

全く素晴らしい朝だった。天地の碧藍みどりが、太陽の光りを透とおして、虹にじの色に包まれて輝いている。

「海の向うの、ずっと先方の方は何処ですの。」

「この碧玉コート・ダジュールの岸やしにも、椰子やしの樹きが並んでいでしょう。地中海うみを越した向うは、アフリカの熱帯地ですよ。それ、あすこがコルシカ島。先日話したナポレオンのこと知ってるでしょう。此処うしろいらは海アルプス。この後の峰うしろがアルプス連山。」

モルガンは細かく教えてくれて、散歩に出て見ようと誘った。

「ええ、あの椰子の下のベンチへ腰かけて見ましよう。」

「その前に、朝の市を見せよう。」

モルガンは花の市のように、種々な花があつて、花売りの床店が一町もつづいてい
る、足高路の方へお雪を伴った。

朝市には、ニースに滞在している人たちが、買出しかたがた散歩に出て賑わしかった。

お雪はまた呆やりしてしまつた。花の香に酔つたように、差出されるままに買いこんでは
抱えた。何処から尾いて来たのか、籠をしようつた、可愛い伊太利亜少年が傍にいて、お雪
が抱えきれなくなると、背中の籠へ入れさせた。

「夫人、夫人。ああ好い夫人だ。お美しいお顔だ、お立派なお召物だ。」

花売りの女たちは、しきりに買手の女たちを褒めてゐる。そうかと思うと、

「なんだ、お前なんかに、こんな好い花が買えるものか。この好い匂いがわからないんだ。
けちんぼう女。」

と、いくら進めても買わない客の後姿に罵っている。

「あら、鮮魚が——」

お雪は、鮮魚の店へひつかかかって、掬い網を持ってよろこんだ。

大きな盤ばんだい台だいに、ピチピチ跳はねる、地中海の小魚が、選よりどりにしやくえた。ヒラヒラと魚からだ鮓さをひるがえすたびに、さまざまの光りが、青い銀のような水とともにきらめいた。また一人の少年が、お雪のお小姓こしやうのように、すぐにそれを受けとっている。

お雪は、ふと、美しい着物は着ていたが、なんにも、購かいたいものも購えなかった、芸げ妓いしや時代の窮乏を思いうかべた。それよりもつと、幼年時代、新京極あたりの賑やかな町を通つても、金魚店の前に立っているだけで、自分で思うように、しやくつて買った覚えのない、丸い硝子玉の金魚入れがほしかった事を、思い出すともなく思いだしていた。

モルガンが払う金を見ていると、夜店の駄金魚を買うのとは、お話にならないほど高い金を、お雪の一時の興味にはらつていたのでした。

青い迷送香まんしようこう、赤い紫羅欄花あらせいとう、アネモネ、薔薇ばら、そして枝も撓たわわなミモザ。それはお雪の手にもモルガンの小脇こわきにも抱えこぼれ、お供の少年の、背中の籠にも盛りこぼれるほどだった。

「この花を、室中へやしゆうへ敷いて、お雪さん休みます。」
と、モルガンはいつているが、黄金色こがねの花が、みんな金貨のような錯覚をお雪に与えた。

ダイヤモンドばかりでなく、自分の身からも光りが発するような気がした。四万円で購わ
れた身だということに、今まで妙に拘わっていたのさえ変な気がした。

こんなに親切にしてくれた男はあったか——お雪は、ミモザの花に埋もれたようになっ
て、椰子の木影のベンチに、クタクタといた。

情人はあった。楽しかった人と、悲しかった人と——けれど、モルガンのような親切な
男は、ない。

はつきりと、ない、と心にいつて見ると、ふと、日光が翳ったように、そうでない、み
んな親切なのだったのではないかと、はじめて気がついた。

楽しかった人——それは粹なことを書いていた、筆の人だった。悲しかった別れの人、
それは京大法科の学生だったが、大阪の銀行にはいった人だった。

あの人たちは、モルガンが、こんなに良くしてくれるのを知って、わたしを幸福に暮さ
せようとしてくれたのかも知れない。

そう考えると、お雪はホロホロとした。言葉もわからない外国へわたしをやってしまう
なんてと、怨んだ事も、馴れて見れば、今日のような日もある——

お雪の心は、悲しいほど柔まっていた。

一生をモルガンにまかせて、何処でも果^{はて}よう、国籍は、もう日本の女^{もの}ではないのだという覚悟が、はつきりした。

「パリと異^{ちが}つて、こんな明^{あかる}いところでも、そんなに淋しいのですか。そのうちにまた京都へ行きましょう。」

モルガンは、お雪が望郷の念に沈んでいるのだと思つて慰めた。

「いいえ、決して淋しくありません。」

どういたしまして、心淋しかったのは、かえつて京都にいた時ですとお雪は言いたかった。それは、モルガンがお雪と結婚して米国へ一緒に立つてから、一年ほどして、京都へ遊びに帰つた時のことだった。南禅寺の近く、動物園のそばの、草川^{くさかわ}のほとりの仮住みの別荘へ、

「あんた、油断してはならへんがな。」

と注進するものがあつて、風波が立ちかけたことがある。

「あんた、先度^{せんど}お出^{いで}やはつた時に、わてに口かけときなさりながら、島原^{しまばら}の太夫^{たゆう}さん落籍おさせやしたやないか。いえ、知つとります、横浜へ、あんたさんの後追いかけて、その太夫さんがお出^{いで}やしたことも。よう知つてますがな。」

と、やかましいことになったのだ。まだ、お雪の話が纏まらないうちに、島原遊廓の、小林楼の雛窓太夫を、モルガンが、内密で、五百円で親元根引きにさせたことを持出して、お雪はその時のことも、本当だろうと気にしたのだ。

一年ぶりで、花の春の、母国へ訪ずれて来たお雪は、知る人も知らぬ人も、着物も、匂いも、言葉も、懐しかったので、忙しく接していた。恰度日本は、露国との戦争に、連戦連勝の春だったので、草川の家の中にも、日米の国旗を掲げて、二人は賑やかな心持ちでいた。

折もおり、丸山公園の夜桜も盛りであつたし、時局の影響で遠慮していた、島原のものという花の太夫道中も、その年は催おされた。

道中の真つさきには、若手の芸妓が綱をとつて花車が曳き出され、そのあとへ、先頭が吉野太夫、殿りが傘止めの下髪姿の花人太夫、芸妓の数が三、四十人、太夫もおなじ位の人数、それに禿やら新造やらついて練り歩くのを、外国人の観覧席は特別に設けたという後だったので、お雪は雛窓のことを思い出して、カッとなったのだ。

——あたしの顔をつぶすのか——お雪は外出するのも厭な気持ちになつてしまった。

お雪には、モルガンに、他に増花が出来たという噂がたつことが、何よりも愁いのだ

った。

だから、あんなに恋しかつた日本も京都も、長居する場処でないとすると、フランスに帰ろうというよりほかはない。

「どうして、アメリカへお出いでにならないんです。」

と聞かれてもすると、モルガンが、フランスが好きなのですと答えたが、其そこ処には、この夫婦が口にしないで、いたわりあっている、夫婦の間でも秘密にしていることがあつたのだ。

——姉ねえさんたちも、お母さんも、楽々と暮しているようだ——

それで好いいのだ、わたしに後の心配はすこしもない。とお雪は叫びたかつた。四万円の身みの代しろぎん金で姉さんは加藤楼おかみの女将おかみになっている。百五十円の月手当は老母としよりの小遣こづかいいは、多いからとて少なくはない。

お雪は、ミモザの花と日光の黄金の光りのなかに、蜂はちのように身軽にベンチから跳ねおきて、

「さあ、もう、あたしは明るくなった。」

と、しつとりと濡ぬれた心を、振りゆすつて言った。

「カジノへ行つて見ましようか、あたしでも賭かけに勝つかしら。」

「いいえ、僕は、こんな快こころよい気持ちのときに、君の胡こ弓きゆうが聴ききたいのだ。どうぞ、弾ひいてください、梨なしの花のお雪さん。」

「それも好いでござんしようね。」

お雪はさからわなかった。四万円のモルガンお雪と唄われたローマンスは、胡弓の絃いとのむせびが、縁のはじまりでもあったから、モルガンも今、自分とおんなじような思出にひたっていたのだなど、

「室へやへ帰つて弾きましようか、此処へ持つて来ましようか。」

「岸はあんまり人がいすぎるね、馬車も通るし。」

「でも、みんな、知つてたことですもの。」

お雪がほほえんでそう言ったのは、自分たちの情史は、あんなに評判されたからという意味だったので、モルガンは愉快に笑った。

——お雪が、二度と語るまい、また、弾くまいと、その時、モルガンと自分との恋のいきさつを、胡弓の絃に乗せて、あの、夢のような竜宮、碧藍みどりの天地へ流したそれを、かいつまんで伝えればこんなことになる。

京都の、四条の橋について、繩手新橋上ルところに、小野亭というお茶やがあった。外人ばかりをお客にするので、そこに招ばれる妓を、仲間では一流としない風習があった。鴨川をはさんで、先斗町と祇園。春の踊りでも祇園は早く都踊りがあり、先斗町はそれにならって鴨川踊りをはじめた。そのまた祇園の歌妓、舞妓は、祇園という名の見識をもたせて、諸事鷹揚に、歌舞の技業と女のたしなみとを、幼少から仕込むのだった。縫いの振袖に、だらりに結び上げた金欄の帯、三条四条の大橋を通る舞妓姿は、誰が家の姫君かと見とれさせるばかりだった。そうした舞妓時代を経ないものは、祇園の廓内でも好い位置を保てないのが不文の規則なのだ。出入りのお茶やにも格があったのだ。十九のお雪に、小野亭の仲居がささやいた。

「あんたを、あの外国人が、ぜひ梅が枝に連れて来ておくれと言うてなさるが——」

梅が枝は円山温泉の宿だった。

「モルガンさんいうて、米国の百万長者さんの、一族の息子さんやそうな。」

日本の春を見に来たモルガンは、沢文旅館の滞在客で金びらをきっていた。

金持ちや美男に、片恋や失恋などがありましようかと、簡単にかたづけられてしまいうだが、恋というものの不思議さは、そこだといえないでもない。

およそ、見るほどのものを陶然とさせ、言い寄られた女性たちは、光栄とも忝かたじけなしとも、なんともかとも有難く感じ奉たてまつつたあの『源氏物語』の御大将おん、光る源氏の君の美貌びぼう権勢をもつてしても、靡なびかなかつた女があつたと、紫式部が、当時の生活描写を仔細しさいにとり入れて書いた作ものさえある我国である。

金と男ぶりとだけがものをいうのなら、むかしや仙台さま殺しやせぬで、新吉原の傾けい城い高尾かおの、大川の船の中での、釣つるし斬ぎりの伝説は生れはしない。

米国の百万長者、モルガン氏の一族で、未婚で、美貌な、卅歳の青年も、お金と美貌だけではこの国の女は思うままにならなかつたのだ。

要約すれば、明治卅年ごろは、金の威光が今ほどでないとはいわれないが、女の心が、物質や名望うすに淡うすかつた。廓くわくの女でも、躰からだは売つても心は売らないと、口はばつたく言えた時代で、恋愛遊戯うすなどする女は、まだだいぶすけなかつたのだ。——すけなかつたというので、なかつたとはいえない。甚だよくない言いかただが、男地獄買かいという嫌な字と、貴

婦人醜行という拭えないとわしい字があるが、それは、他のことで、その時代を書く時に、そんな嫌な言葉を生んだ風潮を弁明して、すべて全の女性に負わせられた恥辱をそごう。ところで、ここにまた、不思議なことに、かつて成せい恋れんした男性を奪うということは、ある種の女には誇りとする傾きがある。その代りにまた、失恋した人、厭きらわれた男ときくと、その人を見下げないと、自分の沽券こけんにさわるように見もしかねない。だから、あんな奴にと思うような男に多くの女がひつかかつて、恋獵人ラブハンターの附け目となり、釣瓶つるべ打ちにもされるのだ。

そこでモルガン氏に帰れば、彼は、米国から、失恋の痛手を求めに、東洋へ来たのだと、何処からとなく知られていた。フランスでも癒いやされない恋の痛手を、慰撫いぶしてくれる女を、東海姫とうかいぎしこく氏国に探ねて来たのだと噂された。

しかし彼は、かなり金ピラをきつて情界を遊び廻り、泳ぎまわった割合に、花柳かりゆうの巷ちまたでさえ、惚ほれた女を、幾度も逃している。

モルガンは、お雪と逢つたはじめは、お雪の十九の年で、あつさり別れているが、お雪の廿一の年に来て恋心を打明け、廿三のときに正妻に根引きした。それが三度目に日本へ来たときのこと、その後、結婚して帰国した次の年に一度、また次の年に来て、それ

きりモルガン氏も日本へは、バツタリ来なくなつてしまつたのだ。

お雪との交渉もまだはじまらない時分、京都へも足を踏み入れない前に、モルガンは惚れた人がある。それは、芝山内の、紅葉館に、漆黒の髪をもつて、撥の音に非凡な冴えを見せていた、三味線のうまい京都生れのお鹿さんだつた。

お鹿さんは、お雪とは、全然容子の違ふ、眉毛の濃い、齒の透き通るように白い、どつちかといえは江戸ツ子好みの、好い髪のを、厚鬢にふくらませて、齒ぎれのよい大柄な快活な女だつた。

お鹿さんは江戸の気性とスタイルを持つた京女——これは誰でも好くわけだ。前代の近衛公爵のお部屋さまになる女だつたが公爵に死なれてしまつた。筆者が知つてゐる女では、これも、先代か先々代かの、尾張の殿様をまるめた愛妾、お家騒動まで起しかけた、柳橋の芸者尾張屋新吉と似ている。私が新吉を知つたのは、愛妾をやめたあとだから、幾分ヤケで荒んでいたが、当代の市川猿之助の顔を優しくして、背を高くしたらどこか似てるものがある女だつた。

「おしかさんは、支那の丁汝昌が、こちらにお出になつたころ、とても思われていたのですよ。」

と、ある時、紅葉館で、一番古参だったおやすさんという老女ひとが、わたしにしみじみ話してくれたことがある。

「おしかさんの傍をお離れにならないで、それはお可哀そうだったの。」

それでも、おしかさんは、みんなが別格にあしらっていたほど、近衛さんの思いものだったから、丁汝昌は清国くにへかえつてからも、纏綿てんめんの情を認しためてよこしたといった。

日清戦争にっしんがはじまってからも、水師提督はおしかさんを忘れなかったのだということをお安さんは知っていたという。だが、二十八年二月、日本海軍が威海衛いかいえいを占領した時に、丁汝昌は従容しゅうようと自殺してしまったのだ。

その後、幾度か、あたしはおしかさんの秘話を聞いて、一人の女性の運命と、生きていた時代との記録を残しておきたいと思いつながら、その機会おきを失って、今では、当のおしかさんも、おやすさんも死んでしまったので残念におもっている。

丁汝昌の死は、モルガンが最初に来た年より、ほんのすこし前のことなので、おしかさんがモルガンの懇望も相手にしなかったのは当然のことだが、モルガンにすれば、おしかさんの京なまりが懐しかったのであろう。京都へ行って、そこでも三代鶴みやつるやその他の一流の舞妓に目をつけた。

外国人の客を専門の繩手の小野亭は、お雪の世話をよくしていた。おとなしいお雪が、胡弓を弾くのを、モルガンは凝と聴しゅついている時があった。傷ついた心をともにむせび泣いてくれるような、胡弓の絃いとの音ねがお雪の心情こころのようにさえ思われて来たが、

「この胡弓をもらって行く。」

と言出したのは、二度目に日本へ来た時だった。

「お雪さんも連れて行きたい。」

といったが、その時、お雪には末を約束した学生があつたが、そうとは言わず、今度逢うまでに考えておくというように、また来ようとは思ひもかけなかつたので、軽くいつておいた。それを信じたモルガンは、アドレスを書いた封筒を沢山渡していった。

次の年、といつても、半年もたたぬうちにモルガンは来て、なんでも根引きするといひだした。それは、こんな噂さえ立つたほどだ。お雪の兄さんが、三条あたりに理髪店を出して、その人が、外国人でもモルガンほどの人にやるならと、独断で、その封筒を失礼してモルガンを呼んだのだと――

ダイヤモンドの指環のお土産みやげがあろうとも、お雪は未来をかけて約束した人にそむく気にはなれなかつた。

「外国人はいやだす。」

と、すげなく断わつても、

「そりやお雪、つれなからうぞ。」

などと怨みうらみをいうのとは違う。お雪が煩うるきくなつて、病氣でようじよう出養生と、東福寺の寺内しないのお寺へ隠れると、手を廻して居どころを突きとめ、友達の小林米調べいかという人を仲立ちに、両手でも持てないほどの大きな籠かごに果物くだものや菓子を一ぱい入れて贈つてくる。花束は毎朝々々来る。

そんなこんななうちに、見舞われたものが、見舞わなければならぬ羽目になったのは、あわれ米アメリカ国青年が、恋病わすらいのブラブラ病やまいになつてしまつたのだ。

「僕は、この胡弓を抱いて死にます。」

古い都の、古い情緒を命とするお雪には、そうしたセンチメンタルが、いっち成功する。「でも、あたし、お妾めかけはいやです。」

とまで、ギリギリと、決勝点近くまで、モルガンは押詰まっていた。

「お妾さんでない。お雪さん、あたくしの夫人おくさんです。」

モルガンは、ちゃんと正妻にして、立派に結婚するという。

なんといつたらよいのか、断わるに断わりきれなくなってしまうたお雪は、

「おつかさんが何と申しますか、よく相談して見て——」

最後の逃路にげみちは、母親よりなかった。古風な、祇園ぎいんの芸妓げいこさんのお母かあさんばかりではない。まだその時分には、牛肉を煮る匂いをきらった老女は多かつたのだ。異人さんではと逃げを張るのは、こうなると、母親が頼みだ。

しかし、お母さんを救いの手に持ち出したことは、古くさい日本的な断わり方だと笑えないほどのヒットだったのだ。その時モルガンは、燃えあがった若い血の流れる体を、冷い手で逆に撫なでられたように、ゾツとしたものを受けとったのだ。

それは、誠によくない思出だった。彼が日本へ慰めを求めに来た失恋ゆえんの所以は、相思の令嬢の母親によつて破られたのだったからだ。彼は厭な顔をしないではいられなかった。

なぜなら、紐ニューヨーク育ニューヨーク社交界の有名マダムより、なおもつと、日本の古都の芸者ガールの母さんの方が、ものわかりがわるく、毛唐人に対して毛ぎらいが甚だしかろうことは、いうまでもないと思つたからだ。

だが、モルガンは、真まじこころ心でかかれと決心した。人種はかわっているとして、この、しおらしいところのある、古くさい人々。男性絶対尊重の女たちにまで、肘鉄砲ひじをもらつては、

それこそはや、何処いずくの国へいっても顔向けの出来ない男性の汚辱を残す。切り出したか
らには、今度は、なんでもかんでも成功しないではおかない――

モルガンが、そうした決心を固めている時、お雪の周囲でも、頭を突きあわせて相談が
はじまっている。

親族会議の方では、古門ふる前裏の小屋こいえに、抱え主、親元、小野亭からも人が来て、つま
るところは、金高で手をひくように吹っつけたらということになった。

「なんとしてもあんださん、毛色の違うた男にはな。」

と、二の足を踏んでいる母親に、姉さんや叔母おほじやひと者人たちは、

「そないに雪が、気にいらはったのなら、加藤の家に養子に来てもらたらいと、皆い
てですがと、そういうたらどうや。」

そら好い考えだと、それも一つの条件になった。

お雪はまた、浅酌せんしやくの席で、鼻屑ひいきになる軟派記者に、鼻声になって訴えている。

「あんだ、面白がつて、あてと、モルガンのことばかり書き立てずに、親身に考えてお
れやす。あて、どうしても嫌どす。」

縮緬ちりめんのじゅばんの袖口がちぢれるほど、ハンケチとちゃんぽんに涙を拭ふくのだが、相

手は、

「そんなことは、他へよそいっていえよ。僕が泣かれたって、どうにもならない。お母さんたちのいう通り、うんと吹っかけて見るんだな。本当に惚れてなきや、いくら米アメリカ国人だって酔狂で大金は捨てやしまい。」

お雪は、そんな相談を、心から思っている、修業盛りの学生にきかせて、頭を乱させる気はないので、その人には、なるべく、きかれても隠すようにしているのだった。

で、正妻でなくつては——から、養子に来る気ならば——になり、最後に四万円と切り出した。

四万円——現今なら、その位のお鳥ちようもく目ではとというのが、新橋あたりにはザラにあるということだが、日露戦役前の四万円は、今からいえば、倍も倍も、その倍にも価する金かねの値打があったのだろう。赤坂の万まんりゆう竜は、壹万円りゆうで、万両の名を高くしてさえいる。祇園のある古い女ひとがいった。

「世界大戦のあとで、なにもかも三倍になったので、パイのパイのパイという唄うたがはりましたなあ、あれは倍の倍の倍ということなのどすえ。」と。

その、パイのパイのパイ時代になると、舞妓の帯も竜の眼にダイヤの大きなのが光るよ

うになつたが、モルガンはお雪に、四万円を、突然ズラリと並べたのではない。

金の封を切つて、ばらまかなくては引っこみのつかない場合にせり詰つてもさすがにモルガン氏は、元禄げんろくの昔の大阪の坊ぼち亀屋忠兵衛のように逆上しないで、静に、紐ニユーヨ育イクから顧問の博士を呼んだ。ピケロー博士というのは法律か、経済学の人なのであつたらう。

モルガンその時しずかに相談役を呼んだのも、もはや三年越しの恋ではあり、四万円の値札が付いたからには、他から物好きな競争者が出るまでは、ともかく無事、よその手生ていけの花となる憂いはないと考へたのでもあつたらう。

で、第一条件の正妻は異議なし、第二の養子婿入りは絶対に無理であるから撤回、第三の問題は根引きの金は二、三万円から段々に糶せり上げて、即金二万円、あとは二千五百円ずつの月賦払いというのから、三万円即金の残り月賦と顧問氏は、算盤そろばんをはじきだした。

出るな、と見込んだからでは決してあるまいが、そうなるとお雪派の策士は、ますますもつて四万円即金を頑張がんばる。

ジョージ・モルガン氏、お雪さんを見初みそめたのは、勘平さんの年ごろだったが、その時卅四歳まじ、纏まとまりそうでなかなかまとまらないのでオスヒスとなつて、ある晩、ピストルを

ポケットに忍ばせ、

「こんなにスローモーションでは堪りません。蛇へびの生なま殺ころしというものです。それというもの、お雪さんの心がぐらついていているからです。わたしは死にます。」

それは全く真剣だったので、お雪は途方に暮れてしまった。

「あなたを、そんなに苦しめるのもあたしからですから。」

と、止めていたお雪の方がヒステリックになって、川の岸に立った。どっちたたずの身の、やる瀬なさに、身を投げて死んでしまおうとしたのだ。

顧問博士もびつくりしたのであろう。早速四万円を取り寄せることになった。

そんなこんなが、古風な祇園町の廓中を震撼させた。

「まあ、お雪はんのこと聞きなはったか？」

と、寄るとさわるとその噂だ。

「四万円だつせ。」

豪儀なことや、という女ものもあれば、あんなに厭がったのだから、あてが代つても好いというふうになつていった。

「ようおすな、四万円。」

「そうどすな、悪うおへんな。」

花柳界ばかりではなくなつた。京都、大阪、東京——全国的な話題になつた。

「噂が立つてしまつてから、打明うちあけるのは愁つらいが、あて、どうしたら好いのか——」

お雪はある日、末はこの人の夫人おくさんにと、はかない望みを抱いていた、情人の机のかたわらに、身をすくめて坐つていた。

「僕はきいていたよ。君の出世を悦んでいるくらいだ。」

と、二十九歳になる、京大法科に通つている、鹿児島生れの、眉目びもく秀麗な、秀才はいつた。

「僕に尽してくれたのは有難く思つているが、果して、君と一緒になれるかどうかは約束出きないし、今、君がどうしろといつたつて、どうにもなりはしない。君は行く方が好い。」

お雪はその場合、死のうといわれたら、当惑するには違ひなかつたでもあろうが、そんなふうおとしこに、愛人が理智的にいつてくれるのが、突つばなされたようにさびしかつた。

説明のしようのない、ただ侘わびしさ——お雪の心に残つているものが、心の中で清算しきれないうちに、結婚予定は進んでいつた。

四万円は結納金ゆいのうきんということになつた。お雪は完全に妓籍を脱したので。

世間というものはおかしなもので、胡弓芸妓のお雪も、さほどパツとした存在ではなかったのに、モルガン根引きばなしが起つてから、メキメキ売れ出てきた。

しかも、だんだん金かね高たかが騰あ上がつてゆくのにしたがって、人氣が上つていって、一流のお茶やさんから引つぱりだこにされていた。勿論もちろん、一流のお客さんたちは、評判になつた妓この顔も知らないとあつては恥辱はとばかりに、なんでもかんでも呼んで来いということになる。お金持ちは我儘わがままだから、そうなると、あつちの茶屋へいつているといえ、なんでも貰もらつて来いというのが、古来くろ、廓わの女に関しては、ことさらに定じやう法ほうのようなお客理だ。

それが、京都の客ばかりでなく、大阪からも来る、東京のよんどころない方かただからちよいと来ておくれというふうにもなつて、三、四日前から口をかけておかなければ、お雪に座敷へ出てもらえないというふうになつていた。

お金をかけてさえそうだから、無代たとなると、これはまた大変、町を——何かの催しがあつて、百人ばかりの芸者が歩いたときは、その中にお雪がいてといったものがあつたので、どれだどれだという騒ぎになり、あれか、これかと、顔のを覗ぞかれて、

「あの時は、えらい目に逢いましたわ。」

と、今日残存の老妓はいつている。

結婚式の着附は――

「婿さんが洋服なら、あんたも洋服にしなされ。」

「そんなおかしなこと出来ますか。」

というので、もう十二月で新規注文はどうかという押詰まっから、急に二軒の呉服屋さん招かれ、モルガンも日本服、紋附きの羽織ということになり、

「紋は何にしましょう。」

お雪さんは平安の都の娘だからも一つ古くいつて、平城京の奈良という訳でもあるまいが、丸に鹿の紋を染めることにした。鴨川かもがわの水は、来春の晴着はれぎを、種々いろいろと、いろいろの人のを染めるなかに、この新郎新婦の結婚着も染められたのだ。年の瀬と共に川の水はそんなことも流してもいたのだ。

三十七年一月、横浜の米国領事館で、めでたく、お雪はモルガン夫人となり、アメリカの人となった。

新聞は、華燭かしよくの典を挙げたと報じ、米アメリカ国トラスト大王の倅せがれモルガン氏は、その恋花嫁のお雪夫人をつれて、昨日の午前九時五十二分新橋着の列車で横浜から上京したと書い

ているが、横浜のグランドホテルから東京の帝国ホテルへ移った時のことだ。

——花婿は黒山高帽子に毛皮の襟えりの付きたる外套がいとうを着ちやくして、喜色満面に溢あふれていたるに引きかえ、花嫁はそれと正反対、紺色の吾妻あすまコートに白の肩掛、髪も結ばず束たばのままの鬢びんのほつれ毛青褪あおぞめた頬を撫で、梨花りかい一枝雨を帯びたる風情ふぜいにて、汽車を出いでて、婿君に手を引かれて歩く足さえ捗はかどらず、雪駄せったばかりはチャラチャラと勇ましかれど、顔のみは浮き立たぬ体ていに見えたり。

と書いている。一等待合室に入つて、お供の男女がチャホヤしても、始終俯うつむ向きがちなので婿どのが頻しきりに氣を揉もんでいたが、帝国ホテルから迎いの馬車がくると新夫婦は同乗して去つたと、胡北こほくへ送らるる王昭君おうしょうくんのようだとまで形容してあるが、これは幾分誇張かもしれない。

三

競馬シーズン季節シーズンになつた紐ニュー育ヨーク社交界では、晩餐ばんさんの集まりでも、劇場ででも、持馬をもつたものはいうに及ばず、およそ話題は、その日の勝馬のことで持ちきっていた。

丁度、そうした時節に、夫の国に行きあわせたお雪は、ある日、競馬見物に連れていってもらった。

と、モルガンを見つけた若紳士たちは、すぐに彼を取りまいて、肩を叩いたり笑ったりして、お雪には、慇懃に握手を求めた。

お雪は、その人たちから、米国の婦人と同様に、丁寧にはされはしたが、好奇心をもった眼が集まってくるのが面伏せでもあり、言葉がよく分らないから、何をいわれているのかモルガンの顔の色で悟るよりほかなかった。

郊外の、みどりを吹く野の風はお雪を楽しませはしたが、競馬に気の立っている、軽快すぎる男女の饒舌は、お雪をすぐに、氣くたびれさせてしまった。

モルガンは友達と打解けて話しあっていたが、

「帰ろうか。」

と、じきに競馬場から出てくれた。

此処へ来ても、お雪は、眼、眼、眼と、痛い視線を感じていたので、家庭へかえるとホツとして、

「お友達と、何の話してらしたの。」

と、きいた。モルガンは、あんまり気乗りのしないふうで、

「例の通り、お雪さんの身元しらべ。」

お雪は済まなさそうに、ほほ、ほほと、薄笑いした。

「また、刀鍛冶かたなかじの娘だと、おっしゃったのでしよう。」

お雪はモルガンが、自分の生れを、日本の魂を打つ刀鍛冶の女だと吹聴ふいちょうし、刀鍛冶という職業は、武士の階級だといって、日本娘お雪を紹介するのを、気まり悪く思っているのだった。

——いいや、彼奴あいつは、そうかとはいわなかった。それどころか彼奴あいつがいうには、モルガン君、君の夫人は、芸妓げいぎガールだと、最近来た日本人がはなしてたよといった——

そんなふうには、友人から、面皮めんびを剥はがれて来たことを、モルガンは押しかくして、

「彼は、どうして君のおくさんは日本服ばかり着ているのだというから、一番よく似合うからさといったのだが——」

モルガンのそういう調子には、何処ふだんか平日とは違うものがあつた。

「実際うるさい奴らだ。」

お雪は、モルガンの楽しまない顔色を見てとつて、ふと、競馬場で摺すれ違ちがうと、豪然と

顔を反して去つた老婦人に出逢つたからだ、気がついていた事を、それとなく言いだし
た。

「あの方ね、あの年をとつた女の方、あれがマアガレットさんのお母さんですか？」

「お、どうして分りました。」

モルガンは隔てなく、椅子を近づけていった。

「お察しの通り、あの老婦人、マツケイのお母さんです。僕を厭つた夫人です。」

エール大学の学生の時分から、思ひあつていて、紐育モルガン銀行に勤めたのも、マー
ガレット・マツケイ嬢と婚約のためといつてもよいほど急いだのだ。

「変ね、あなたが、お遊びになつたからつて、お母さんが破棄なすつたのですつて？」

日本の芸者お雪には、青年で、金持ちの息子が、すこしやそつと遊興したからつて、思
ひあつた娘をやらないなんという母親があるかしらとわからなかつた。その時も、まだも
つと、他の理由があるのではないかと、うなずけない気持ちだつた。

「そんなことは、みんな、口実に過ぎない。」

と、モルガンはお雪の肩に手をおいた。

「フランスへ行つて住まおう、あつちの館は好いよ、静かで——」

モルガンが父母と住んだ、壮麗な館やかたは、レックスにあつたが、彼は新妻と暮すには、パ
リが好いと言つた。

「アメリカでは、仏教——お釈迦しやかさまの教えは異教というのです。着物を着ている女は、
異教徒だとやかましい。」

それもお雪には、わかつたような解らない、のみ込みかねたものだった。

開けたアメリカにもまた、古い国の家柄とおなじようにブルジョア規約があるのだった。
四百名で成立っている紐育金満家組合が、まず、ジョージ・モルガンを除名し、モルガン
一家の親戚しんせき会では、お雪夫人を持つ彼を、一門から拒絶した。

お雪の生家では、出来ない相談として、モルガンに養子に来てくれといったが、モルガ
ン一族は親類づきあい附合あすらしいというのだ。

「日本であそんで、フランスへ行こうよ。」

「ええ、丁度お里帰りですわ。」

お雪は、日本へ帰れるのが嬉しかった。米国の社交界から、漂泊的な生活をしている上
に、クリスチャンでない女と結婚したという理由で、非紳士的行動だと、追われるように
立ってゆく、モルガンの悲しい心は知りようがなかった。

あの草川くさかわのほとりに仮住居かりずまいしていたのは、その時のことだったが、モルガンが浮気する——そんな噂うわさに浮足うきたつて、お雪はフランスへ永住のつもりで、二度目の汽船に乗った。いよいよもう何時いつ帰るか故郷の見おさめだと思った。

みんな、行ったばかりの、パリの感想というものは、暗かった、古っぽかった、湿っぽかったという巴里は、恐おそそらくお雪にも、他の日本人が感じた通りの印象を与えたのだろう。すこしいつくと、あんな好い都はない、何もかもがよくなつてくるというパリも、そこまで住馴染いなじまないうちに、お雪はも一度京都へやって来た。

「今度は、お母さんと三人で住まおう。ちようど、須磨すまに、友人の家が空あいたそうだから。」

と、モルガンは優しい。

須磨では、のんきな、ほんとうに気楽な、水入らずの生活が営まれた。

「パリというところは、どんな処ところだい。」
と生母に訊きかれると、

「古くさいけど、好いところもある。」

「雨はどんなに降る？」

「一日のうちに、幾度も降ってくるのだすえ、今降ったと思うと晴れる。」

「では、いつも傘持^{かさ}って歩いとるの。」

「いえな、誰も持^もつてしまへん。軒の下や、店さきに、みんなゆつくり待^{まち}つてやはるのえ。東京の人のように駈^かけだすものありやへんわ。フランスで、雨にあつて、もうやむのがわかつていても、駈^か出すのは、日本人ばかりやいうけれど——」

「西^こ京^ちのものは、さいなことしやせん。そんなら、パリというところ、京都に似てるやないか。」

「しつとりした都会^とで、住^とんだら、住^とみよいところで、離^とれにくいそうやが——」

母子がそんな話をしているときに、モルガンの父の病気が重いという、知らせが来た。

幸福は永久のものではない。モルガンは一足さきに立つたが、父親には死別した。お雪は一月ばかりしてフランスへ後から帰った。それが母親への死別となった。

モルガンは、父の莫^{ばく}大^{だい}な遺産を継いだ。お雪もパリの生活が身について来たが、やっぱり初めのうちは、デパートへ行けばデパート中の評判になり、接待に出た支配人が、友達たちに、お雪さんの観察評をしたりするように、煩^{うる}さかったが、アメリカ社交界とはだいぶ違っていた。

シャンゼリゼの大通りを真つすぐに、パリの、あの有名な凱旋門がいせんもんの広場は、八方に放射線の街路があるそうだが、モルガンの住宅は、アベニウホツシユのほりだという。

森とよばれる、ブローニユ公園を後にした樹木に密こんだ坂道の、高級な富人の家ばかりある土地で、門構えの独立した建築物たてもものが揃そろつているところにお雪は平安に暮してはいる。しかし、日本人ぎらいの名がたつと、誰一人付きあつたというものがない。

マロニエの若葉に細かい陽光の雨がそそいでいるある日のこと、一人の令嬢マドモアゼルと夫人マダムが、一人の日本婦人を誘つて、軽い馬車をカラカラと走らせていた。

「オダンさまの夫人おくさま。」

と、美しい夫人マダムはいった。

「そのお邸やしきが、モルガンさんのお宅だそうですが、お訪ねなすつたらいかがです。」

フランスのオダン氏は、日本の美術学生の面倒を見るので有名で、世話にならない者はないほどだった。夫人は日本婦人で、お雪の年頃とおなじほどだった。

「でも、」

と、オダン夫人は考えぶかく同乗ひとの女の好意を謝絶ことわった。

「あまり、お逢いなさりたがらないそうですから——」

そうした、おなじ国の、おなじ年頃の、フランスの人になっている、おなじ京都の女性ひとにさえお雪は往来ゆきぎがなかつたのだ。生家へも、母親の死んだとはあまり便りがなく、一お昨年ととし京阪を吹きまくつた大暴風雨おおあらしに、鴨川の出水をきいて、打絶えて久しい見舞いの手紙が来たが、たどたどしい仮名文字で、もはや字も忘れて思いだすのが面倒だとあつた。

だが、母のない家へも仕送りは断つていない。財産管理者きちょうめんから几帳面きちょうめんに送つてきた。

お雪には子はないのか——誰も子供のことをいわないから最初からないのであろう。モルガンは四十三歳でこの世を去つてしまつてゐる。

それは、世界大戦のはじまつた時だつた。紐ニューヨーク育ニューヨークに行かなければならない用事があつて、モルガンはお雪を残して単独で行つたが、フランスが案じられるし、ぐずついていると、ドイツの潜航艇が、どんなに狂暴たぐまを逞たくましくするかしれないと、所用もそこそこに、帰仏をいそいだのだった。モルガンが乗つていたのは、あの、多くの人が怨みを乗せて沈んだルシタニヤ号だつた。どうも汽船ではあぶないという予感から、ジブラルターで上陸し、一日の差で、潜航水雷の災難からは逃れたが、どうしても死の道であつたのか、途中スペインのセヴレイまで来ながら、急病で逝いつてしまつた。

それからのお雪は、異郷で、たった一人なのだ。

—— 来年あたり帰りたいが、一人旅で、言葉も不自由だというおとずれが、故郷へあつたと聞いている。

それがもとの間違いであろうが、祇園町にいた老女としよりが、東京のあるところへ来て、

「お雪さんが帰って来てなさるそうや。昔の学生さんのお友達で、留学してやはった、大学の教師さんと夫婦になつて——」

それは、誤伝の誤伝だった。あちらに長くいて、映画では東郷大将ふんに扮したという永瀬画伯が、お雪さんだと思つて結婚したとかいう婦人と、久しぶりで帰郷したこの間違った。その婦人は十歳位からフランスで育ち、ある外国人の未亡人で、女の児がある浅黒い堂々とした女だということだ。

お雪は、パリの家に、ニースにただ一人だ。いえ、ニースでは、イタリア人が一緒だったというものもあるが、モルガンのない日のお雪は、孤独だといえましょう。

青空文庫情報

底本：「新編 近代美人伝（下）」岩波文庫、岩波書店

1985（昭和60）年12月16日第1刷発行

1993（平成5）年8月18日第4刷発行

底本の親本：「春帯記」岡倉書房

1937（昭和12）年10月発行

初出：「東京朝日新聞」

1937（昭和12）年4月22日～5月7日

入力：門田裕志

校正：川山隆

2007年9月5日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

モルガンお雪

長谷川時雨

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>